ドイツ人が心酔した日本の家

100年古民家

何世代にもわたる生活を見守ってきた日本の民家

「日本の民家は美術品のようです。それを手掛ける大工は、高度な技術を持った職人で、また芸術家でもあるんですね」

そう語るのは、築140年を超える古民家をリノベーションして暮らす、ドイツ人のカール・ベンクスさん。7寸（約21㌢）角のケヤキの柱や見付（高さ）1尺3寸、見込（厚さ）5寸の巨大な差鴨居が存在感を放つ見事な家である。

一般的に古民家といわれるのは、釘や金物をほとんど使用せず、継手や仕口と呼ばれる加工で組まれた伝統的軸組工法の家で、築100年以上か、それに近いものを指す。屋根はトタンや瓦もあるが、もとは茅葺きが多く、壁は土壁で、漆喰などが塗られている。

こうした古民家が残るのは、大抵高齢化、過疎化が激しい田舎の集落だ。そこに、街から移ってきた人たちが、空き家を再生して暮らしているのである。

滋賀県高島市の在原集落に暮らす福井朝登さんもその一人。

「以前は設計事務所に勤めていたんですが、ふと、人が生きるために本当に必要な力ってなんだろうと思って、田舎で自給的生活をしてみたくなったんです。家はほとんど衝動買いですね」

福井さんが手に入れた家は、10年近く空き家で廃屋同然だったため、土地を買ったおまけで付いてきたようなもの。大掛かりな修復が必要な古民家は、建物自体に資産的価値はないに等しいのだ。その分、修復費用はピンキリで、100万円ですむ場合もあれば、新築より高くつく場合もある。

気密性は低く、冬の寒さは格別だ。建具のすき間から吹き込む風は冷たく、床や壁には断熱材など入っているはずもない。

古民家に現代の住宅のような快適性はない。でも、素材の特性を生かして緻密に建築された家は、手入れをすれば100年でも、200年でも維持できる。地域の暮らしに根ざし、自然と一体となったたたずまいは美しい。その屋根の下では、何世代にもわたる暮らしが営まれてきて、家はそれを見守ってきたのだ。歴史と思い出が詰まった、まさに次の世紀の子孫まで暮らせる家なのである。

1 広々としたLDK。もともと床に埋まっていた囲炉裏の石を外に出し、火を楽しめるソファテーブルにしている

新潟県十日町市
カール・ベンクス（69）邸
築140年以上　建築デザイナー

ドイツに日本の民家を移築する仕事などをしていたが、1993年に十日町市竹所集落に移住。世帯数11の限界集落で、その活性化に取り組んでいる。江戸時代末期に建てられたという家は、一度すべてを解体してから、骨組みを生かして再生。柱や梁など、一つひとつの材料がとにかく巨大だ。アルゼンチン人の妻と2人暮らし

2 何げない壁を床の間のように利用　3 2階の書斎。窓横の棚受けには寺から出た廃材をあしらった　4 ピンクの壁が印象的な外観だ